---------- (はじまり) ----------

タケシ「あっー、なんかこう、パパッと答えが出ないもんでしょうかね」

アスカ「おぉ、書類の山に埋もれてるね。みんなそうやって大きくなっていくんだよ。タケシくん」

タケシ「もう、仕事多すぎですよ。書類の中身を見なくてもぱっと頭に浮かんだり、客先の要望をテレパシーで読み取れれば楽なのに…」

アスカ「それって、超能力じゃん」

タケシ「いいですよ。使えれば超能力でも何でも。でも、ないでしょ。超能力なんて」

アスカ「あら、そうでもないわよ。昔、こんなことがあってね。紅茶に入れるミルクなんだけど、ミルクとお湯とどちらを先に入れたか分かるっていう婦人がいてね」

タケシ「そんなの分かるわけないじゃないですか。カップに注いでいるところを透視できれば別ですけど」

アスカ「でも、婦人は本当に全部当てるのよね。そこで、統計的に検証することになって試すと…」

タケシ「試すと…(ゴクリ)」

アスカ「統計的には十分な有意差があったのよ。婦人の言っていることは本当だったの。しかも、その検証をしたのはかの有名なフィッシャーなんだから」

タケシ「じゃあ、超能力があったんですか！？その婦人って人は？」

アスカ「まさか、実際に味が違うらしいのよ。味覚に敏感な人は分かるんだって。確か、なぜ味が変わるかも科学的に解明されていたはずよ」

タケシ「なんだ…。やっぱり、ないじゃないですか。超能力なんて」

アスカ「それがね。そうとも言えないのよ。透視力や念動力、思考を読む能力といった超能力を科学的に解明しようという試みは100年も前から続いてるの。ほら、ESPカードって知ってる？」

タケシ「あの、『○川＋☆□』みたいな5種類の絵柄のやつですよね。大学でオカルトに凝ってる友達がいて持ってましたよ。そいつはゼナーカードって言ってましたけど…」

アスカ「そのカードを提唱した人が超能力をESP(超感覚的知覚)と定義したのよ。要するに五感以外の知覚よね。で、その5枚のカードを使って、一般人2人でテストするの。一人が念じてイメージを送って、もう一人が浮かんだイメージを記録するわけ。5枚一組を5回セット試すのよ。もちろん、お互いは仕切りで見えなくなってる」

タケシ「どうだったんですか？やっぱりダメでしょ。5枚を5回セットだから平均して20%の正解率だったんじゃないですか」

アスカ「あら、今日は頭が切れるわね。でも、残念。907,030回実験して、平均正解率は21.44%」

タケシ「まさか…。有意差があったんですかって、ありそうですよね90万回以上だし」

アスカ「そうね。計算すると母比率の検定で34.2857。この21.44%が偶然起こる確率は限りなく0%よ」

タケシ「あ、あるんですか？超能力って」

アスカ「ま、統計的には有意な差があるってことは確かね。紅茶のように味覚に頼るわけじゃないから、まさにESP、超感覚的知覚ね」

タケシ「うーん。でも微妙ですよね。普通の人が抱く超能力のイメージって全部当てるってものだから…。20%が21.44%だとちょっと弱いかな」

アスカ「自称超能力者を使えばいいんだけど、彼らを使うと厳格な実験が出来ないのよ。これじゃ能力が発揮できないとか。それに他の人で試せないんじゃ、再現性もないし」

タケシ「それで、一般人なんですね。でも、もっとすごい証明はできないんでしょうか。なんか、こう。オォーって感じの」

アスカ「そんなタケシくんのためにあるのが、ガンツフェルト実験よ」

タケシ「なんですか。そのガンツフェ…って」

アスカ「これは驚きよ。テレパシーの実験なんだけど、防音、電磁波防止の2つの部屋にそれぞれが入って、片方が絵のイメージを送って、もう一方が受信するのよ」

タケシ「そんな…。出来たらすごいですよ。でも、複雑そうで不正が入り込みそうですよ」

アスカ「そこは大丈夫。絵は48種類で、それを12の封筒に入れておくの。サイコロ2つを振って1つの封筒を選び、また、1つのサイコロを振って4つのうちから1つを選び、それを被験者に見せて、もう一方の被験者に届くようにイメージを念じてもらうわけ」

タケシ「なるほど厳密ですね。でもイメージの受け側はどうなんですか？」

アスカ「そっちも大丈夫。目を覆って、耳にもノイズを聞かせてるから五感は使うことは不可能よ。それに2つの部屋は10㎞も離れてるから」

タケシ「そ、それで…。う、うまくいったんですか？」

アスカ「800回以上実験して、正解率は35%だったの。偶然だと1/4だから25%なんだけどね。これも偶然35%になる確率は0%」

タケシ「す、すごい。証明されてるじゃないですか。100発100中じゃないけど、35%だったらすごい！」

アスカ「でも、けちを付ける人はいてね。サイコロを振る過程で不正が起こること。絵を選ぶとき手で触れるから痕跡が残せることから認めてないのよね」

タケシ「そ、そんな屁理屈…」

アスカ「ま、科学的アプローチとしては妥当な文句よ。そこで、もっと厳格にオートガンツフェルト実験が提唱されたのよ。今度は絵の選択から被験者への提示まですべてコンピュータ仕掛け」

タケシ「け、結果は…」

アスカ「2832回の実験で正解率は31%。ちょっと落ちたけど、それでも31%に偶然なる確率は0%」

タケシ「や、やったぁ！やっぱりあるじゃないですか！超能力。そう思っていたんですよ。ガンツフェルト実験、万歳ですね」

アスカ「あれ？君、超能力に否定的だったんじゃなかったっけ？」

タケシ「え？ま、まあ、見方は変わるもんですよ」

アスカ「じゃ、超能力でその書類の山、早く片付けてね。納期は明日よ」

タケシ「えぇー。そ、それとこれとは別ですよ(泣)。ところで、先輩ってどうしてそんなに超能力に詳しいんですか？」

アスカ「そりゃ、私がエスパーだからでしょ。ほら、あんたの右手にある一番下の書類。納期過ぎてるわよ」

タケシ「あ…。な、なんで分かるんですか！？まさか、本当に…」

アスカ「あんたが遅れそうな仕事に予め、赤のポストイット張っておいたのよ。よ～く見えるようにね。予想通り、まだ結果貰ってないし！」

タケシ「ず、ずみまぜん…(でも良かった本当に超能力じゃなくて)」

---------- (つづく) ----------

Copyright(C) 2014 rpn hacks! All rights reserved